

緑と水のある、なし

――近代都市と前近代都市を分けるもの――

1) 日本に近代都市が見い出せなかった

私は関東州大連市に生まれ育ち、その後に満洲国奉天市（現瀋陽市）、次いで新京特別市（現長春市）に移り、敗戦の年にソ連軍の侵攻のせいで、命からがら大連市に逃亡し、そこから日本へ「引揚」と日本国家が美称する強制出国をさせられて、最初は和歌山県日高郡藤田村（現御坊市）、次いで大阪市天王寺区寺田町、さらに生野区林寺新家町に住んで高津に通った。高津を卒業してからは、東京に進学したので東京都区部を転々とした。

さらに京都で修業をし且つ職を得たので京都でも暮らし、その後東京に転勤した。

このように大連・奉天・新京と、大阪・東京・京都に暮らして、大陸都市と日本都市との違いを痛いほど感じた。つまり、同じ「近代（化）」と言いながら、その内容が全然違う、ということである。

この相違感は決して、戦災ということとは関係ない。高津時代にはすでに戦災復興は着々と進んでいたから、日本の都市は最早廃墟ではない。それなりに再建されていた。東京時代は、第一歩から「もはや戦後ではない」といわれた時期だったし、その後は所得倍増時代・高度成長時代・列島改造時代・バブル経済時代だったから、戦後日本が誇る「首都東京」が建造されていた。京都にいたっては京都人でさえ「京都は戦災を受けてない」と思っているほどの都市なのだ（本当は京都御所を含めて二度小規模な空襲を受けている）。

実は都市のこの日本型の戦後復興のあり方、現代日本的都市造りのあり方、ひいては、そもそも明治維新以来の日本式近代化にこそ、ヨーロッパ的近代との全き異質性があることを後に知るのだが、ただこの段階では自分がなぜ、日本には近代都市は無いと感じたのかは判らなかつた。これがはっきりと判ったのは前後6年ドイツ・ミュンヘン大学に留学して、ミュンヘン等のヨーロッパ（北はスカンジナビア・南はユーゴスラビア、東はロシア・西はフランス）の諸都市の現状を実体験し、それらの歴史を知ってからである。

2) 緑無く不潔で人口稠密な前近代のヨーロッパ都市

ヨーロッパの都市は以前から今のようなものだったわけではない。前近代の中世・近世（日本の年代に対応させると平安後期から江戸後期）の都市を否定することによって近代都市が生まれたのだ。そこで近代ヨーロッパ都市を語る前に、前近代ヨーロッパ都市がどんな状態だったかを述べておこう。

この時代のヨーロッパ都市は、城壁に囲まれた人口稠密で、森林や野原は勿論のこと、

農地に至る「緑」を全部市外に追放した完全な人工居住空間だった。まして川や池・湖などあろうはずがない。

しかしそれ以上に大問題があった。下水道はおろか、そもそも便所が無かった。一般民家だけではない。あのパリ郊外の壮麗なベルサイユ宮殿にも便所がなかったのだ。余談ながら、明治国家がこれを模倣して赤坂離宮（当初は東宮御所・今は迎賓館）を造ろうとした時、取り寄せた設計図に便所が無いので慌てたとのこと。

糞尿は便器で受ける。都市には糞尿を溜める穴があるのだが、誰もそこへ便器を持って行かない。窓から道路に捨てるのである。台所ゴミ等も全く同じ。そして道路には犬や豚や家禽やらがうろついていて、彼らもそこで排泄する。徒歩以外の交通は乗馬か馬車である。これがまた排泄し、かつはこうした糞やゴミをかきまぜ粉砕する。その粉塵が都市の空気の一部となる。だから前近代欧州都市は極めて不潔かつ臭い空間だった。

こうした状態は、今は「華のパリ」と呼ばれるフランスの首都とて例外ではなかった。いや、パリこそ最も不潔で悪臭の巷であった。市民は糞尿を窓から捨てる時、せめてのエチケットとして「ギャルデ・ロー！」（「お水に注意！」）と言った。しかし、それでも糞尿をかぶった行人は、間抜け者、として嘲笑されるだけで、糞尿を投げ捨てた当人はなんら責められなかった。

フランスを欧州最強の国にした太陽王ルイ14世がベルサイユに宮殿を無理やり建造した理由の一つは、王都パリの余りにも臭さにある。フランスの高名な哲学者ヴォルテールはベルリンにプロイセンのフリードリヒ大王を訪ねた時、パリの汚さ臭さを愚痴った。もっともベルリンだって大変不潔だったが。

ところが当時世界最大の都市江戸をはじめ京、大坂など江戸時代（近世）の日本の都市は極めて衛生的で、「物見遊山」の緑地も多く、農業が盛んだった。いや、農業は都市でこそ発達したのが日本である。例えば銘柄野菜の名は全て都市での地名である。小松菜・練馬大根・九条葱・壬生菜等々。

なお言えば日本農業が肥料を盛んに使いだしたのは、都市農業が繁栄して農作物が商品になったことによって、肥料も商品として売買されてからなのだ。この点は最終章の「里山」の項でもっと詳しく述べる。

3) 近代市民革命と都市の近代化

こうしたヨーロッパ都市の醜態を一新したのが1789年のフランス革命から1848年の2月・3月革命、という一連の近代市民革命である。そしてこの革命のテーマの一つが都市改造なのである。その都市改造の要点は、1)都市を束縛している城壁の撤去、2)大規模下水道の造設等都市の徹底的衛生化、3)都市内に森林原野農地の造成、である。

これの先鞭をつけたのがバイエルン公国で、1789年8月14日、つまりフランス革命のちょうど1ヵ月後に、首都ミュンヘンの宮殿の背後に、森と野と川と湖からなる壮大

な自然公園を造って市民に開放した。その名も「英国式庭園」。これはベルサイユ宮殿を典型とするバロック式庭園の反対物である。バロック式庭園は極端な人工美を特徴とするのに対して英国式庭園は自然景観そのものを美とする近代的美意識から生まれた。バイエルンには近代市民革命の象徴フランス革命が勃発した直後に、近代市民的ニーズに合致した庭園を公園（公衆に開放された庭園）として造成したのである。

なお、この英国式庭園は原語ではイングリッシュ・ガーデンで、だからガーデニングとは自然景観式緑地を造ること。だから今の日本の「ガーデニング」とは全く違う。

このミュンヘンの「英国式庭園」はどこに所在するかと言えば王宮と官庁街と繁華街とが連なる場所で、日本の東京なら日比谷・霞が関と日本橋・銀座であり、大阪なら梅田・心斎橋筋・谷町筋、京都なら御池通・河原町である。

その後、欧州各国の都市は市街地内と市街地周囲に、無数の緑地公園と沢山の森林を造成した。これらの森に行くことが市民にとって最高のレクリエーション。その中には猪・鹿・兎・鳥が大勢棲んでいる。しかも多くは犬を連れた散策客と猪母子が道ですれちがっても、犬も猪も決して荒れない。静かにすれちがう。そもそも、いかなる種類の動物でも（無論ホモ・サピエンスも）子持ちの母親ほど獰猛なものはない。にもかかわらずこういう行動様式を彼女らはとる。

そしてこれらの広葉樹と針葉樹の混ざった林である森林では、木材の伐採もしている。だから「都市林業」という概念が欧州では成立し、しかも実施されている。またまた余談だが、ドイツの林業は豚を放牧するための森林を造ることから始まった。

市街地で林業が行われているのだから、農業が営まれるのは当然である。だがここでは日本人でもイメージしやすい都市での一般農業の紹介は省き、「市民農園」を語る。

「市民農園」という表現のほうが今の日本では一般化しているものを、原語であるドイツ語でいうと、以前は「シュレーバーガルテン」、今は「クラインガルテン」である。「シュレーバー」とは医者の名前で、都市住民には農業をやるのが心身共に健康によい、と提唱したからである。

最初は都市民、とくに貧しい市民の自給用菜園にと考えて時のドイツ各領邦政府は自領内の都市に対して市民に農園を提供するよう命じた。だから当時は「貧者の菜園」とあだ名されていた。第1号は1832年（天保3）年設立。

だが、シュレーバーの提言と市民運動（「シュレーバーガルテン協会」）のお蔭で、単なる食料自給ではなく、都市住民の広義の肉体的精神的健全化に資する施設だと意味転換が生じた。「人間エコロジー的癒しの地」である。このようなものとしての「市民農園」が設置されたのは1870年（明治3）。そして時のドイツ第二帝国宰相で「鉄血宰相」と呼ばれるビスマルクがこれを全国の全ての都市に設置させた。

その後名称が次第に変化して「クラインガルテン」となる。直訳すると「小農園」だが決して小さくない。平均400㎡（120坪強）で、日本のそれがまさに1坪菜園か、せいぜいで30㎡（10坪弱）なのとは桁違い。しかも「クラインガルテン」には畝だけで

なく、芝生に樹木に果樹があり、その上「ラウベ」という宿泊・炊事が出来てトイレもある建物がある。だから日本での「市民農園」とは質量とも全然異質のものである。しかも「クラインガルテン」が沢山集まった「クラインゲルテン」（「市民農園団地」）にはクラブハウスがあって、レストランでもある。

こうした「市民農園団地」が、人口120万のミュンヘンに68団地ある。このデータは私が今から10年前の1999年にとった数値だから、2009年の今はもっと増えていよう。しかも市街地に、である。日本の独和辞典はみな「住民のための郊外の農園」とあるが、これは間違い。市街地内にこそ多い。官庁街にも住宅街にも工場地にもある。大阪なら御堂筋や天王寺や東淀川や、さらには布施や堺の中心部にあるようなものだ。

4) 自然を追放した日本的近代都市一

ことは明治維新に始まる。

このように、ヨーロッパの近代都市とは森と水と農地を多く内包している生活空間、のことなのである。だから、市民にとって森林等の自然とは日常生活の不可欠の一部であり、また、市内の重要拠点である各所の広場では必ず食料品の青空市場が開かれていて、基本的に食料自給が可能なのがヨーロッパの近代都市である。

ところが日本における都市の近代化とは、都市から森と野と水と田畑を追放して、都市を、最初は煉瓦の、後には鉄筋コンクリートのジャングルにしてしまうことである。このことが引揚げて来て、日本の三大都市に違和感を感じた根本原因だろう。大連は旅順とともにロシア人が造った都市だし、奉天と新京は、関東大震災跡の東京をヨーロッパ的な意味での近代都市にしようとして、政界と財界と官界と学界に拒絶された日本では異端者の建築家集団が彼らの素志を実現した都市。だから私はヨーロッパ的近代都市で生まれ育ったのだ。その意味で同じく新京で育った加藤隆二兄の意見と感想を是非お聞きしたい。なお兄が通われた室町小学校（正確には室町在満国民学校）は私の母校でもある。

ともあれ、どうしてこうした誤訳ないしボタンのかけちがいがおこったのか。

ことは明治から始まる。テロと謀略の結果実現できた暴力革命である明治維新の勝利者薩長土肥藩閥政権（実質は薩長閥政権）は、その首領である大久保利通と岩倉具視を頭にした総勢約150人の大欧米視察団を、政権発足早々に派遣した。明治4年出発・7年帰国の大変な長旅である。だが彼らは（今日に至る膨大な人数の視察と留学と全く同じく）欧米から、その「近代」を結局は学ばなかった。その結末が満洲事変から大東亜戦争という暴挙とその敗北だ、と私は思う。

ここでは都市造りについてだけ述べる。

大久保は、近代国家には「大学」なるものが必要不可欠だ、と吹き込まれていたので、その気になり、その用地として上野の山を選んだ。ここは全山東叡山寛永寺の境内だった。

この寺は、まずは東の比叡山を意味し、その比叡山にある延暦寺に対抗して同じく元号

を寺名にした。つまり延暦寺が国家鎮護天皇安泰の祈願寺であると全く同様（日本のほとんどの大寺は民衆の幸福など視野にない）、江戸幕府である国家の鎮護と徳川家である王家の安泰を祈願する寺である。そして座主は天皇家から法親王を迎えて、京都公家勢力が謀叛を起こすか外様大名勢力が京都の天皇を担いで徳川幕府に反抗するような場合には、この法親王を東の天皇に担いで徳川政権の正当性の根拠とする。つまり南北朝分立の近世版である東西朝分立を徳川家康以来江戸幕府は想定していたのである。

だから勤皇を錦の御旗とする薩長閥軍は、天璋院（徳川家定御台所）らの努力で江戸城攻撃ができなかったから、敵の第二のシンボルである寛永寺の破壊を企み、反薩長軍彰義隊を巧みに上野に誘導した上で、戊辰戦争最大の激戦の上野戦争をおこして寛永寺を灰塵に帰した。したがって大久保にしてみたら上野の山には何らの価値も感じなかったから、土地破壊（現代用語では「用地造成」）を行って大学を建築しようとした。

この暴挙に驚いたのは、当時の政権にとって唯一の知恵袋である御雇外人団だった。彼らは協議し、意を決して大久保に諫言することにした。「閣下、このような素晴らしい自然が世界最大の都市の内にあるとは、しかもそれが泰西文明国ではなく、極東のお国にあるとは、われわれ一同驚嘆しております。文明国では、都市にわざわざこうした自然を造成しております。それが文明というものであります。したがって、この上野の山はそのままお残しになり、なにか建物をお造りになるなら皇室関連の物のみとされ、大学はどこか他の地に御創立遊ばしませ」。

その結果、前田藩邸は「心字池」（後年の俗称は「三四郎池」）と過剰な子福者徳川家斉の息女の一人が輿入れしてきた象徴である御守殿門（俗称赤門）だけを残して徹底的に破壊され、破壊の跡地に東京大学（後に帝国大学、さらに後に東京帝国大学、敗戦後はまたもや東京大学）が創設されたのである。

こうも破壊好きな大久保だが、御雇外人団の諫言はよほどこたえたらしく、例えば彼と同じ薩摩閥の男が堺県令（後の知事）になると、浜寺・羽衣・高師浜にかけての海岸の松林を伐採して薪として売却していた時、彼はそれを中止せよと命じた。さしもの県令も薩摩閥の頭領には逆らえず、伐採を中止した。お蔭であの美しい松林は残った。だが、これを破壊したのが戦後日本の明治権力よりはるかに愚かな支配層なのだ。今、堺市と高石市の海は巨大な埋立地に変貌して大規模コンビナート群と成り果てている。申し訳程度に、浜寺・羽衣公園なるものと、埋立地との間に細い水路を造っただけだ。

5) 日比谷公園・明治神宮・吹上御苑——かぼそい抵抗

こうした日本式都市近代化に抵抗した男がいる。日本人として最初の造林学教授本多静六だ。彼は武蔵国南埼玉郡の豪農という徳川幕府に親近感をもつ家に生まれ、だから当然ながら薩長閥人ではないから官僚としての出世は望みが初めから絶たれている。しかも、なにせ彰義隊頭取の娘を嫁に迎えるような人物だから。したがって東大林学科（当初は東

京山林学校・入学後東京農林学校)に入学した。当時の、つまり日本最初の造林学教授はハインリヒ・マイアーという後でやや詳しく述べるミュンヘン大学初代造林学教授カール・ガイアーの愛弟子で、だからガイアーの後継教授となった人物。

本多は卒業後、このミュンヘン大学に留学を命ぜられた。このミュンヘン大学は大変変わった大学なのだ。

ヨーロッパの総合大学(アメリカでも「アイビー・リーグ」という名門大学)は医学と法学を例外として、工学や農学といった実学は扱わない。これらは全て専門学校、よくって単科大学で研究教育する。林学もそうである。ところがバイエルン王ルートヴィク二世は、自分の祖父が創立し父親が発展させたミュンヘン大学という総合大学に林学科を設けることにした。

彼は後世「夢みる狂王」と呼ばれるほどロマン主義の熱狂的な信奉者だった。したがって音楽におけるロマン主義の最高峰リヒャルト・ワーグナーに心酔し、近代市民革命の運動家だったためザクセンの当局から逮捕状が出てスイスに逃亡中の彼を巨額で招聘した。ルートヴィク二世が日本でも有名なのは「ノイシュヴァンシュタイン城」というディズニーランドの城のモデルになった大観光名所を造った男ということのようだが、この「白鳥岩山城」の内部は全てワーグナーの諸々の楽劇の場面で飾られている。こうしたロマン主義傾倒はついに国家財政を傾けたため退位させられ、シュタルンベルク湖で謎の死(今なお政府による暗殺説が根強い)を遂げたほどである。

私がここでルートヴィク二世・ワーグナーを説いたのは他でもないロマン主義と都市緑化が密接な関係にあるからである。

ロマン主義の一大特徴は自然志向である。そして自然の典型的存在は森林である。前近代は森林は悪魔怪獣魔女猛獣盗賊等の棲処で、常人の立ち入るべき場所ではなかった。それは『グリム童話』を読めば判るし、大陸外でもイギリスの、今のアメリカならテロリスト集団と呼ぶだろうロビンフッド一味の根拠地もシャーウッドの森だった。そしてロビンフッドらの衣装が緑色なのが物語るように、緑は悪のシンボルカラーだった。

そういう観念を根底からひっくりかえしたのが、近代市民革命のイデオロギー、ロマン主義なのである。それまでは音楽でも絵画でも主題にされなかった森林を賛美しだした。その実例は枚挙に暇ないが、音楽で一人だけ挙げると、最初のロマン主義音楽家ウェーバーの『魔弾の射手』、絵画なら最初の風景画家ターナー。そして日本では古典派とのみ思われるがロマン主義の先駆者と言ってもよいベートーベンは『田園』を作曲した。

こういう時代精神をモロに受けたルートヴィク二世は自分のお膝元のミュンヘン大学に断然林学科を造ることにした。1878年(明治11)4月21日。しかも経済学部の学科としてである。他の林学科は次々に大学に昇格しても、それらは全部総合大学理学部の一学科か、工科大学の一学科でしかない。これは現在もそうである。だからミュンヘンのケースは世界で類を見ない林学科なのだ(1980年代に林学部という単独の学部となった後、ミュンヘン工科大学の農学部・造園学部等と合体して「緑の大学」となる)。

そしてルートヴィク二世が招聘した初代の造林学教授カール・ガイアーこそ近代林学を創立した人物である。彼の学説を一般の人々に理解できる面で一言で言えば、「林学の根本は生態学である」。「生態学（エコロジー）」という概念は1866年（慶応2）までにヘッケルが創造したものだから、ガイアーは出来たてのほやほやの学問を自分らの学問の基盤とし、それによって近代林学は成立したのである。そんなミンシュヘン林学へ本多は留学した（明治23年）。彼は猛勉強してついに経済学博士（農学博士ではない！）の学位を取得するが、大学の前を通るルートヴィク・シュトラセなる大通の対面の国立図書館・農林省・王宮等の向こうに広大な「英国式庭園」があり、彼は勉学で疲れた脳を休めによく訪れた。そして、「近代首都とはこうした広大な森林公園を持つものなのだ。だから東京も持たねばならぬ」と考えた。

明治25年に帰国すると自分が主宰する帝国大学農科大学林学科造林学講座の分室として造園学研究室を造った。「日本には保存すべき建物は一つもありません」と西洋人に公言するような工科大学（工学部都市工学科）の第一世代などに都市緑化など任せるわけにはいかない。まして農村のことしか念頭にない農学科の連中に出来るはずがない。すべからず林学科、とくに我輩が直接担当する以外に方途はない――彼はそう判定した。だが帰国してからも長らく素志を実行する機会はこなかった。都市に森林を、などとは時の人心にとって想像もできないことだったからである。ようやく機会が到来したのが帰国後9年の明治34年。日比谷公園造設を依頼された。

そこで本多は日本で初めての洋式庭園、しかもミュンヘンで日々見た英国式庭園を造ることにした。これには官民・上下あわせて驚愕した。まさに前代未聞であり、連中のイメージする“近代都市庭園”とは全く異質だからである。当然各方面から猛烈な反対が浴びせられた。そこで彼も若干の譲歩をして、今日のようなショービンの公園となる。面積は16ha（4万8千坪）。とてもミュンヘン中央駅の傍にあつて「オクトーバー・フェスト」（和訳すれば「10月祭」。だがなぜか日本人は「ビール祭り」と訳す）だけのための広場「テレージエン・ヴィーゼ」の41haには遠く及ばない。まして「英国式庭園」には。

ただ彼がここでやったことで一つ述べておきたいことは、大きな樹木の移植という日本に前例のないことである。公園を造成する際に邪魔物として伐り捨てられることになった大樹（今日でも横行していることだが）の銀杏を本多は移植した。最近私は行ってないので残存しているかどうかは知らないが、有名なレストラン松本楼の傍らにである。

だが思う存分やれる機会がやってきた。大正4年、代々木に明治神宮を建立し、そこに広い神苑を造ることになり、それを本多が担当することになった。本多は、今度こそ多種多様な樹木から成る近代都市型庭園にすることにした。

だが案の定横槍が入った。入れたのは政府側責任者の大隈重信である。肥前出身で藩閥の片隅にいるだけの人間ながら、会計ができる、という唯一つの取り柄のお蔭で（勤皇の志士・明治の元勳たちは坂本竜馬も西郷隆盛も大久保も桂小五郎も伊藤博文も誰一人会計がわからなかった）元勳に成り上がった大隈の頭にある神宮の森とは、伊勢神宮と日光東

照宮でしかない。そんな頭だから「明治神宮の森は杉だらけにすべきである」と強硬に主張して本多案を潰そうとした。

だが、明治政権とその後継者大正政府など頭から馬鹿にしている本多には大隈の威光など全然効き目がない。彼は反撃した。しかも大隈らが抵抗できない論拠をもって。

「明治大帝がお拓めになった大日本帝国の版図に生えている樹木を、内地は申すまでもなく、北は樺太から南は台湾、西は朝鮮・満洲まで、広く集めて大帝の御遺徳を末永く讃え奉る森にいたします」。

こうして出来上がったのが総面積70ha（21万坪）の壮大な、総樹種数365種の針葉樹広葉樹混交人工林の「神宮の森」なのである。そして台湾檜が、内地で乏しくなった天然檜の代替品たりうることが実証したのも「神宮の森」造成の大事な副産物である。

6) 「古都」の風情を喜んで壊す京都人――現代三都寸描

しかし東大林学、ひいては日本林学に本多の学説と肝っ玉を引き継ぐ者は出なかった。出てたら昨今の森林・林業・都市計画・人生環境に係わる事態と思考の惨状は生まれていない。第一、本多以後ミュンヘン大学に留学した者は私までいなかったのだから。

事態としての惨状は、経済企画庁が「もはや戦後ではない」と誇った昭和30年頃から始まろう。それが激しくなったのは昭和39年の東京オリンピックに向けての東京大破壊だろう。その破壊を水についてだけ言う。

「江戸八百八町」に対して「大坂八百八橋」と大坂（阪）が「水の都」であることが誇られるが、しかし実は江戸・東京もまた水都であった。下町・川向こう（隅田川の東）は勿論、山の手も川が沢山あり、市民にとって交通・漁業・風情・憩いの重要な手段だった。私の家は江戸初期からの江戸人で、とくに父など神田生まれの神田育ちだが、隅田川でも神田川でも白魚が泳いでいて、人間もお茶の水辺りの神田川で泳いだという。

水と言えば海も忘れてならない。「江戸前」というのは決して江戸（東京）風のことではない。江戸の前の海でとれた魚介類のことなのだ。同じ江戸（東京）湾でも、房総半島や三浦半島の先でとれたものは「江戸前」ではない。江戸（東京）の沢山の川が湾に流れ込んで海水と混じってできる汽水が最高の魚介類をつくるからだ。

これを全部壊したのが東京オリンピック。江戸時代から今日に至るまで道路原点で江戸東京のシンボリックモニュメントである日本橋の真上に高速道路を架けるというナンセンスはまだ良い方で、ありとあらゆる川を埋めて道路等にしてしまったから、超人気ラジオ番組「君の名は」で有名な数寄屋橋も消えてしまった。その後の田中角栄列島改造内閣から「バブル経済」に至るまで、東京中は一大土建現場と化し、森や川はおろか、ちょっとした空き地まで消えてしまった。例えば貴重な市街地内空き地の淀橋浄水場も、新宿副都心と称する超高層ビルジャングルと化した。江戸前の海の汚濁は言うまでもない。

要するに、以前の江戸・東京には溢れるほどあった自然が完全に消されてしまった。

大阪がどんなに変貌し、どんな現状かは、この拙文を読んで下さる諸兄姉がよくよく御存じだから私は書かない。ただ一つ申したいのは、近代ヨーロッパ人なら、そして私なら北梅田の旧JR跡地を森林公園にする。大阪は東京に比べてさえ余りにも緑地が少ない。だから折角生まれた空き地を高層ビル群にするのは勿体ない。既述のように近代都市とはああいう場所にこそ黙って森林公園にする。だが日本ではやはりそういう発想は出ないようだ。関西出身で自然志向派として著名な設計家でさえ巨大な穴を掘って建物を建て、その上を緑地にする、という呆れ返る愚案をとくとくと全国紙で述べる体たらく。

だが、三都の中で最も呆れるのが京都である。官民あげて「古都」らしさを一所懸命喜んで壊している。

まず手始めが堀川やら紙屋川やらをどんどん埋めていった。次いで京都駅という京都の正面玄関に山羊のオチンチンというぴったりの渾名がつけられた京都タワーを建てた。醜悪さもさりながら、これだけでも高さ制限が云々されるのに、御池通と河原町とが交差するところに、条例で定められた高さ制限を緩和させてまでして京都ホテルの建設を強行した。それから後は醜くも高いビルの乱立である。お蔭で大文字焼きが市内からは見えなくなった。祇園祭の山鉦巡行も見にくくなった。

ヨーロッパの都市では、新式の建物は旧市街に建てることは許されない。市外のみにも認められるのすぎない。しかも様式・外観・色彩等が厳しく規制される。だからいやしくも「千年の古都」を誇る京都なら、“近代的”ビルは古都域外にしか認めるべきではない。百歩譲って旧市街地内に建てることを許すとしても、せめて東寺の塔や八坂の塔よりも低くなければならない。

ましてや森林公園など京都には皆無である。緑地さえ極めて乏しい。東山も嵐山も醜態だ。寺社は観光産業化以外に生きる術を知らないから、境内の景観や山林の破壊を続けている。これらに宗教を求めることは無い物ねだりだ。

京都は市電が大変便利な道路網になっている。なにせ「碁盤の目」だから。ところが京都市当局は市電を全面的に廃止した。表面上の理由は自動車通行渋滞解消である。

ところがミュンヘンなどでは1960年代後半から、歩行者と自転車の専用地域を、とくに繁華街に設定し、市電の利用を奨励しだした。この政策はその後ますます強化されている。自転車専用道路も大変幅員が広く、その自転車も前後各2人ずつの子供席があったり、ハンドルの前に子供が3人から5人乗れる箱型の席がついているものまである。そして市電も市バスも地下鉄も国鉄（日本で言えば私鉄も）皆自転車が無料で持ち込める。

この例にならえば、京都では御池通から五条通までの河原町と丸太町から河原町までの四条通は、救急車・消防車等の公用自動車や特定の業務用自動車を除き、歩行者・自転車・市電のみの区間とすべきだ。これでもヨーロッパの実情からすると矮小だが。

京都市当局は市電を全廃した後に地下鉄を敷設した。そのせいで例えば、地下水脈が絶

たれたため地下水に依存する職業が困惑している。また建設過程で歴史的遺物に沢山出くわしたが、その少なくない物が破壊された。ヨーロッパの都市では地下鉄敷設によって地下水脈が絶たれるなどということは考えられない。それどころか市役所前等々市内いたるところにある広場には噴水と水飲場がある。

ついでに言おう。ヨーロッパでは第二次大戦での米英ソによる爆撃と地上戦およびその後のソ連軍による民主化運動武力弾圧によって、都市は壊滅した。ところが市民は手作業で煉瓦一つ・モザイク一つ・ステンドグラスの破片一つを回収して、昔の姿に都市を完全に復元した。ミュンヘン、ドレスデン、ブレーメン、ワルシャワ、ブダペストがその好例だ。ニュルンベルクに至っては戦災を絶好のチャンスとして、戦災前の姿どころか中世の栄華の時代のニュルンベルクに復古させた。かくして過去と現在が共存している。これがヨーロッパ式現代都市なのである。

ところが日本はまるで逆。戦災で破壊されたことを奇貨として、昔とはまるっきり違う“現代的”都市にしてしまった。京都にいたっては空襲らしい空襲を受けていないにもかかわらず、これまで述べたように、自らの手で「古都の風情」を破壊し続けている。だから京都には点としてしか世界遺産がない。ヨーロッパのように都市全体が世界遺産に指定されることなど、絶対に不可能である。

一言で言えば、現代の日本の都市は江戸時代のそれよりも退化している。

7) 自然を知らない現代日本人

以上述べてきたように、現代日本の都市はまるで中世・近世のヨーロッパ都市に似ている。自然を見事に排除している上に、およそ非人間敵である。にもかかわらず現代日本人はそのことに気がつかないでいる。その端的な例が自然の誤解と農林業についての無知である。常識を知らないと言ってよい。以下、特徴的な事例を羅列してみよう。

イ) 日本人はなにかというと「自然に優しい」という。しかし自然とは人間ごときに優しくしてもらわねばならぬほどヤワではない。自然の強さ怖さは高村奉樹(旧名泰雄)兄や藤本勇兄に語ってもらうのが一番よいが、私でさえ実感している。

この「自然に優しい」という表現はどこから発生したかを推測すると、どうもドイツ語の"naturfreundlich"ではないかと思われる。この表現はドイツ語圏(ドイツ・オーストリア・スイス・リヒテンシュタイン・北イタリア・ルクセンブルク・西チェコ・西ポーランド・東フランス)、さらには北部ゲルマン語圏(北ベルギー・オランダ・デンマーク・ノールウェイ・スウェーデン)に古くからある。英語に訳されて"naturfriendly"。日本語に訳すなら「自然親和的」。柔らかい訳語にすると「自然と仲の良い」である。それがどこで「優しい」に曲がったのだろう。畢竟自然とはどんなものか、現代日本人は知らないからだろう。

ロ) なぜか「有機肥料」したがって「有機農業」が大流行である。しかし「有機肥料」

は最悪の肥料であることは、植物生理学・農芸化学が明治初年に、そして生態学（今流行語のエコロジー）が昭和初年に実証済なのだ。

先ず前者からだが、植物の養分は従来有機肥料と世界各地で信じ込まれてきたが、実は無機物が植物の養分なのであって、有機肥料は無意味であることが実証された。

次に、生態学が食物連鎖（今では食物網）なる関係を発見した。つまり、植物は太陽光線をエネルギーとして水と二酸化炭素と無機塩とから有機物を合成する。その有機物を動物が養分とする。そして動物植物を微生物が分解して無機物にして、これが再び植物に戻されて植物の養分となる。

さらに京大系の農芸化学が明らかにしたことは、有機肥料は分解する過程で熱と毒液と毒ガスを発生し、酸素を消費するから、植物生育に最も重要な根系、とりわけ肝心な吸収根に打撃を与える。だから「有機肥料」は百害あって一利なし。

思うに「有機肥料迷信」が生まれたのは、肥料の過剰投与による弊害を、化学肥料それ自身の弊害だと誤解したからではないか。化学肥料そのものには問題はない。いけないのはやりすぎである。なお言えば、私など森林生態学を齧った者からすると、そもそも農業に肥料は要るのか、とと思っている。森林は肥料無しであれだけ大量の物質を生産しているのだから。森林と農作物との違いは葉の量で、後者は前者に比べて葉の量ははなはだ少ない。とすると農業でも雑草を残せばどうか。物質生産すなわち光合成と窒素獲得にとって雑草は農作物の協力者、と考えられないだろうか。それにしても日本農業は病的になまで除草に偏執している。

ハ)「間伐しないと森林が荒れる」「モヤシのような林になる」と騒ぐ人が多いが、これは真っ赤な嘘である。世界で初めて出来た京大の森林生態学が昭和30年過ぎに解明したことだが、森林には「自己間引き機能」というものがあって、森林は年数を経るごとに林木の本数を自分自身で減らして行く。だから人間が間伐をしなくても心配はない。

次は私が調べたことだが、大学院生のころ全国を調べ回って、日本林業は間伐をしないことが特徴であることを実証できた。例外的に間伐をやっていた林業地はたったのはたったの3か所。山國林業（京都市）、吉野林業（奈良県）、智頭林業（鳥取県）だけ。しいて挙げれば北山林業（京都市）だけで、他は全く間伐なしで森林は元気に育っている。

そもそも天然林、まして原生林は全然間伐されていない。それでもやはり元気である。また、「間伐」という言葉だが、他の林業作業用語は倭言葉なのに、これは漢語。ドイツ語の"Durchforstung"をドイツ林学を輸入した東大が直訳して造った言葉なのだ。ということは間伐なる作業は日本に土着したものではない、ということ。

ニ)「森林は地球温暖化を防ぐ」もまた真っ赤な嘘である。

これも京大森林生態学が昭和30年代に実証したことだが、森林の葉の量には限界がある。そして二酸化炭素を吸収するのはこの葉。ところが樹木の幹、枝、根は酸素を消費して二酸化炭素を排出する。しかもこれらは年々増量する。だから或る年になると、葉が二酸化炭素を吸収する量より幹等が二酸化炭素を排出する量の方が多くなる。この逆転年齢

は日本の森林の場合おおよそ30年。おまけに森林とは生態系だから、存在しているのは樹木だけでない。鳥獣もいれば微生物もいる。これらは全て二酸化炭素の排出者。さらに落葉落枝も二酸化炭素を排出する。したがって森林生態系総体として考えれば、森林が二酸化炭素の吸収者である年数はほんの僅かなのだろう。

それにしても、なぜ世界で日本だけは「気候変動」と言わず「地球温暖化」と言うのだろうか。二酸化炭素、そして窒素酸化物の排出が多くなれば、地球は温暖化とは反対の寒冷化して、ヨーロッパ・北アメリカ、そして東アジアは氷河地帯化する、というシナリオが欧米にはあるというのに。

ハ)「ブナ林などの広葉樹林は保水力が大きいが杉や桧の林は少ない」も嘘。

森林の保水機能がどこにあるかという、地表の草や灌木の層でもなければ、その下の有機土壌層でもない。一番深い底の岩層と不透水層なのだ。地上に林木が茂っていなければならぬが、その林木の樹種はなんでもよい。だからブナでも杉でも同じこと。このことは私たち林学の学生が必修授業の「森林理水・砂防学」で教えられるのだ。

ニ)最近、突然「里山」という言葉が流行しだした。その「里山」とは何のことかという、諸々の人々が各々諸々の意味を込める。平均すると下記のような意味だろう。

「里山とは、稲作文化の発達とともに形成された多目的の農用林である。考えてみれば、日本列島に農耕文化が根づく以前、そんな半人工林があったわけではない」(09年4月4日付朝日新聞・大阪本社版)。

これは何重にも嘘である。森林に熱を入れるわりに森林に無知な朝日新聞らしい。

- 1) 実は稲作文化形成以前、具体的にいえば縄文時代にも「里山」はあった。
- 2) 農耕文化イコール稲作文化、ではない。稲作以外の農耕も沢山あったし、稲作以前にも農耕があった。「農耕の始まりは弥生文化で、それは稲作」とは歴史の迷信であって、縄文時代も農業は盛んだった。ただし稲作は中国から(あるいは朝鮮半島を経由して)流入したのは弥生時代。とはいえ日本全土が稲作だったわけではない。畠や畑(焼畑)農業も広範囲に最近まで行われ続けている。とくに日本の国土面積の大半を占める山村と所謂「東国」(今の岐阜県以東)の平場で。その証拠は文字にもある。本物の漢字では「田」一文字で農地全部を意味するが、日本農業は水田と陸田の二元文化だから、「田」だけでは不都合なので、「国字」(日本製“漢字”)を造った。それが「畑」。見ての通り火と田の合成。つまり焼畑のことである。また「乾いた農地」という意味で「畠」を造った。かくして日本人は農地総体を表現する時、必ず「田畑」と二元的に表現する。だから日本人全員が米を常食するようになったのは昭和30年頃からである。米を食べる地域でも、正月には絶対餅を食べない「餅忌み地域」が沢山あった。だから「日本人の主食は米・日本人は米の文化の民」というのは明治政権以来の国家権力がばらまいたイデオロギー。
- 3) 「稲作文化と結びついた農用林」とは具体的になんのことだろう。われわれ林学でいう「農用林」とは大きなずれが感じられる。せいぜい推測できることは、稲作の肥料として

の下草落枝落葉（近年の表現では緑肥）を採集する林、ということか。しかし稲作にとって緑肥は全くのマイナーな肥料。使わなかったと言ってよいほどだ。日本で施肥が始まるのは古くて鎌倉時代、より確実なのは南北朝・室町時代で、肥料の主力は人間と家畜の糞尿と鯀や鰯、下って菜種の絞り粕。ほとんど全部商品として購入したものだ。日本は古くから商品経済社会で、とくにこの時代は商品経済が大変繁栄した。江戸時代においては商品経済社会そのものである（「近代以前の農山村は自給自足経済社会」とは実証的研究をしない歴史学者の寝言でしかない）。だから施肥農業も農産物の商品化が盛んになったことに誘発されて開始されたものだろう。なお、人間と家畜の糞尿も大半は商品として購入したものだ。当時生まれてきた都市の糞尿を買ったり、畜産業者や運送業者から家畜の排泄物を買ったりした。鯀・鰯・菜種粕等が商品肥料であることは言うまでもない。しかもこうした商品肥料の主たる需要先は畑作で、米作が肥料を大量に使うようになるのは後世のこと。ひょっとすると明治後期からではないか。なお、この項目は米の専門家である高村兄が私なんかよりずっと詳しい

4) 「半人工林」とはなんのことだろう。われわれ林学屋には皆目わからない。

5) そもそも「里山」という言葉だが、かつて日本語には「里山」なる単語は無かった。どんな国語辞典・古語辞典にあたっても、「奥山」に対する人里近くの「山」は「端山」か「外山」である。あんな程度の辞典の『広辞苑』（岩波書店）でさえ「里山」を搭載するのは1998年の大改訂による第五版からである。林業辞典にも無かった。

だから「里山」は新語で、その造語者は京大に世界初の森林生態学研究室を創設した四手井綱英先生である。林政林学が無視してきた人里の林を重視せねばならぬ、が造語の動機である。それは昭和30年代前半のことで、私は先生から直接造語したての「里山」について教えて戴いた。先生は、「里山」では薪を採ったり（炭は奥山のもの！）、焼畑を含めた畑作をしたり、柿や漆やらの果樹や特用樹を育成したりした、という。そして杉や桧などの人工造林は「里山」から始まった、とのこと。後年私は全国を回って、この先生の「里山」概念が事実であることを確認できた。

6) 以上のことから、造語者四手井先生の説とは全く離れ、農業のあり方・里山利用のあり方の真実を知らずに、今日したり顔で里山論をふりまく輩の話をみると大変な違和感に襲われる。

大変長い文章になりました。常日頃、今の日本は奇怪しい、と書いているうちに長々とした駄文になりました。しかし、こうした常識に反する考えをするようになったのも、高津で3年過ごしたせいだと思っています。

追記

ドイツには森林立入権がある

先に書いたエッセイで「ドイツ人にとって森林は日常生活の一部」旨を述べましたが、そ

のことを説明するための大事な事例を忘れていましたので、追記させて戴きます。

ドイツ語圏には古くから「森林立入権」(ヴァルトベトレーテンレヒト)という権利が国民に認められてきました。今では立派に成文法となっています。つまり、州によって違いますが(ドイツ・スイス・オーストリアは完全な地方分権国家なので)、あるいは森林法、あるいは自然保護法、あるいは環境保全法に明定されています。

それは「エアホールンク」(日本語の感覚だと最広義のリクレーション)の目的ならば人は誰でも森林に自由に立ち入る権利がある、そしてその森林は自分の所有だろうが他人の所有だろうが、また国有林だろうが公有林(区市町村有林・入会林)だろうが私有林だろうが自由、という権利です。森林で散策・登山は勿論、その地域の慣習が許す範囲内の量の山菜・果物・茸を採ってよく、また飼い犬等を連れて入ってよく、ただし乗馬と車の走行はきめられたコースだけで許される、というものです。

かくしてドイツ語圏の人々は、市街地・郊外・田舎・山の森林に日々自由に入って楽しんでいるのです。この権利を国家が蹂躪したら革命騒ぎになるでしょう。

ところがドイツ語圏から林政林学を輸入したのに、近代日本はこの森林立入権は輸入しませんでした。だから他人の森林に入ることが禁じられ、今日に至っております。

その好例が長野県木曾谷の森林で、江戸時代までは住民が勝手に入れたのに、明治維新で皇室有林のことである「御料林」(主に伊勢神宮式年遷宮用材を採る)になると、住民が立ち入ると厳罰に処されることになりました。そのため大量の罪人が生まれて牢屋が不足し、木曾川の河原にバラックの牢屋を沢山急造しました。「我々が目指した維新とはこんなことではなかった！」と嘆いた島崎藤村の父は、結局発狂して死にました。この顛末を息子藤村は名著『夜明け前』として残しました。

現在最も立入制限が厳しいのがドイツ林学の輸入商である東京大学の演習林です。次いで東大林学の実践機関である国有林が厳しく、例えばあるアホな青森営林局長のせいで、世界遺産「白神山地」を完全封鎖地域にしまいました。

こんなことはドイツ語圏のみならず欧州では考えられません。いや欧州だけではなく、海洋国立公園を含む国立公園を管理運営しているインドネシア林業省だって、こんな馬鹿なことはしません。かりにやったら、オラン・フタン(森の人間)等の少数民族をはじめ多くの人間を森林から追い出さなければなりませんから、全土で内戦が起こります。

日本は平和な国ですね。